

大日影トンネル遊歩道と桃の花、 あるいはほうとう その3

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

ワ イナリーカフェでワインと食事を平らげたあと、ほうとうも食べたいと同行者がいいだした。底なしの食欲に戦慄したものの、私もアルコールで満腹中枢が麻痺しており、悪魔のささやきに身も心もゆだねてしまった。そうして、ブドウ園が軒を連ねる三四号線を西へとむかい、和風民家にしか見えないほうとう屋に入った。すると、ほうとうだけではなく、鳥モツ煮や馬刺しなど、つまみも充実していたから徹底的にやっつてしまい、ホテルの夕食は絶望となった。

せめてもの腹ごなしと、JR山梨市駅まで歩くことにして、西から北へ進路をとると、いきなり桃畑が広がっていた。桜より鮮やかなピンクの花は、まだあげ初めし前髪の少女のように愛らしい。いままではブドウ園ばかりだったのに区画分けしているのだろうか。右に左に待望の桃の花とたむれ歩く。

そうして山梨市駅に着いてから、タクシード棚山の山腹にある笛吹川フルーツ公園へ向かった。甲府盆地の桃畑を一望できるだろうと踏んでいたが、思い描いた光景そのままが眼下に広がっており、外輪山の向こうに白い富士山の雄姿までみえた。

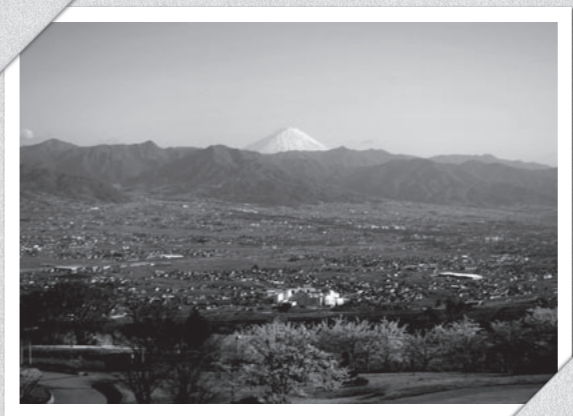
ところで二〇一一年八月号でも紹介したが、甲府盆地には湖水伝説が伝わっている。その昔、湖だつ

た甲府盆地の南端を切り開き、沃土を拓いたというのだ。同じく湖水伝説が伝わる京都府の亀岡盆地が、かつて湖だったと証明されていることからしても、まったく荒唐無稽な話とは思えない。それが証拠に甲府盆地の南方は、近年まで洪水の常襲地帯で、しばしば湖の様相を呈していたのだ。私の眼下に広がる甲府盆地は、さながら桃色の水をたたえた湖のように見えた。

翌日、再び桃畑をめぐるながら勝沼までもどり、ワイナリーレストランへ向かうことにした。その手前まで来ると、ほうとうの幟がはためいており、門に「慶千庵」の屋号と個人の表札が掲げられていた。なんとも立派な店構えにそそられたが、今日は完全に洋食の腹になっていたので、我慢して予定のレストランへと向かった。

さて帰り道。やはり慶千庵の門をくぐってしまっていた。撃沈した昨日の教訓を全く生かすことができない。すると「ここ、建設会社が経営しているんじゃないの」と同行者がいう。なるほど店の横に地元の建設会社があり、社名が表札の苗字と同じだ。聞けば、社長のご母堂が二年前にはじめたという。素朴なお人柄のご母堂のほうとうは、やさしい味で満腹に近い腹にもすんなりと収めることができた。

すっかり満足して勝沼ぶどう郷駅にたどりつくと、満開の桜が一斉に散り始めていた。ちょうど散り際の端境期に立ち会うことができたらしい。桃と桜が同時に咲くのは珍しく、大雪の影響で遅れていたという。次から次へと桜の花が、風に渦を巻きながら流れていく。まるで季節はずれの花の精が、芽吹きはじめた若葉に急かされて、慌てて駆け去っていくかのようなだった。



桃色の水を湛えた甲府盆地

[交通] 笛吹川フルーツ公園へは、JR山梨市駅からタクシーで約10分